

『ペリクリーズ』におけるマリーナの説教の背景をめぐって — Virginité と Puritanism の視点から —

丹羽佐紀*

(2014年10月28日 受理)

Marina's Sermon in *Pericles* and What It Means: “Virginité” and English Puritanism

NIWA Saki

要約

『ペリクリーズ』4幕2場の売春宿の場面でマリーナが主張するのは、自らの *virginité* が持つ絶対的価値と、それが簡単に失われる場所としての売春宿に対する嫌悪である。彼女が、次々と客を改心させてしまうことに対し、宿の女将は、このままでは全員「ピューリタンにされちまう」と嘆く。初期近代イングランドの観客にとって、「ピューリタン」という言葉の響きは、しばしば揶揄のニュアンスを含む。したがって、おそらくは笑いを誘ったであろう女将のこの台詞は、マリーナの *virginité* に対する頑なさも、些か滑稽な行為と見える効果をもたらしている。

そこで本稿では、売春宿におけるマリーナの説教を、『ペリクリーズ』上演当時の *virginité* とピューリタンに対する概念との関係性において考察する。さらに劇全体の中でこの場面が、ペリクリーズの放浪やライシマカスの女性歴とどのように結びつくのかについても明らかにする。

キーワード：virginité、ピューリタニズム、劇場、貞節、カトリック

はじめに

『ペリクリーズ』4幕2場において、売春宿でマリーナが女将に説教する場面は、シェイクスピアによるオリジナルの部分だとされている。この場面でマリーナが主張するのは、自らの *virginité* すなわち処女性が持つ絶対的価値と、それが簡単に失われる場所としての売春宿に対

* 鹿児島大学教育学部 准教授

する嫌悪である。彼女が、買春目的でやって来る客を次々と改心させてしまうことに対し、宿の女将は、このままでは「悪魔があの子のキスを買いにきたって、ピューリタンにされちゃうだろう」(“she would make a puritan of / the devil if he should cheapen a kiss of her”(4.5.16-17))と嘆く。⁽¹⁾ 初期近代イングランドの観客にとって、例えばミドルトン(Thomas Middleton, 1570?-1627)の*A Chaste Maid in Cheapside*(c.1613)や*The Puritan, or the Widow of Watling Street*(1606)に代表されるピューリタン風刺の劇作品のように、おそらくは笑いを誘ったであろう女将のこの言葉は、virginityに対するマリーナの頑なさを、些か滑稽な様相を帯びた行為に見える効果をもたらしている。マリーナが客を改心させ、ライシマカスにも真摯に己れの virginity を説くこの場面は、単純に彼女の純粋さをアピールする場面としてではなく、もう少し別の側面を持つ場面として捉える必要がある。

本稿では、売春宿におけるマリーナの説教を、当時の virginity とピューリタンに対する概念との関係性において考察する。それによって、劇全体の中でこの場面が、ペリクリーズの放浪やライシマカスの女性歴とどのように結びつくのかについても明らかにしたい。

1. アンティオケの場面

そもそも、1幕1場においてペリクリーズが、アンタイオカスとその娘との近親相姦に気がつく謎解きの場面は、そのグロテスクなあらすじ展開によって最初から観客にその特異性を印象づけるが、同時に、ペリクリーズの愚かさを露呈する側面も併せ持つ。ここでペリクリーズは、王女の見た目の美しさに魅かれ、彼女を外見と同様に美德も兼ね備えた女性と信じ、求婚者の一人として名乗り出るのである。

Pericles: See where she comes, apparelled like the spring,

Graces her subjects, and her thoughts the king

Of every virtue gives renown to men,

Her face the book of praises where is read

Nothing but curious pleasures, as from thence

Sorrow were ever razed, and testy wrath

Could never be her mild companion.

(1.1.13-19)

王女に対する彼の称賛の台詞は、少なくともこの時点でペリクリーズが、うわべの美に惑わされて命を落とした他の求婚者たちと同様であることを示している。その愚かさは、Kahn が “Antiochus’ s riddle scheme impressively depicts the castration threat (the stage is decked with the heads of failed suitors)”(212-23)と指摘するように、おそらく舞台上に並べられた過去の求婚者たちの頭部にペリクリーズが囲まれるという視覚的演出によっても象徴的に示されると言える。

ペリクリーズは、近親相姦を見抜いたことを悟られ、身の危険を感じて遍歴の旅に出ることになるが、言ってみればそれは、彼の見誤りの代償の旅ともとれる。彼の旅、あるいはこの劇は、virginité が既に歪んだ形で失われたアンティオケの世界から始まっていることに注目すべきである。Kahn は、ここに見られる父と娘の近親相姦をウロボロス (uroboros) の図のイメージで捉え、新たな世代を産む子宮の本来の役割を自ら拒絶して「邪まな欲望」(“a guilty desire”)(212) 故に virginité を捨てた娘が罰され、子宮本来の次世代へとつなげる役割が回復されるための旅として、ペリクリーズの放浪の旅とマリーナとの再会を捉えている。

Underlying the riddle in *Pericles* is the ancient image of the *uroboros*, the mythical snake swallowing its own tail, nourishing itself from its own substance. . . . It signifies the mystical and perhaps sinister unity of life and death in woman, a mortal creature who gives birth to another creature that will also die. In the specific context of incest that the riddle traces, however, this mystical continuity of life and death is perverted; the union between the princess and her father denies the ongoing process of producing life from one generation to the next; her womb, receiving the seed from which she herself was generated, is a haven of sterility and death instead of the source of life. . . . In particular, the riddle stresses the destructive confluence of father and daughter, which will be canceled out by the role Marina is to play as one who figuratively and positively “gives birth” to her own father. . . . He [Pericles] is pointedly enjoined to learn patience, the virtue analogous to renunciation of the oedipal project. Unable to do so, he withdraws from the world in a deathlike trance, from which only his daughter can save him. (211–13)

2幕2場において、ペンタポリスに辿り着いたペリクリーズがセーザを手に入れるために命を賭けて槍試合に出る場面は、アンタイオカスの娘を手に入れるために命を賭けて謎を解く場面と、その花嫁選びのプロセスにおいて明らかに重なり合っている。観客はこの場面で、アンタイオカスの娘とセーザを比べずにはいられない。⁽²⁾ ペンタポリスでの槍試合参加は、ペリクリーズ自身にとって名誉挽回のために不可欠であると同時に、観客にとっては花嫁選びのやり直しを想起させる。

2. ライシマカスの女性歴

5幕1場でマリーナは、ペリクリーズのライシマカスに対する申し出によって、最終的にライシマカスと結ばれることが約束される。ペリクリーズは、娘を大事にしてくれたという理由で、ライシマカスに感謝の言葉さえ述べる。だがマリーナがライシマカスと出会うのは他ならぬ売春宿であり、ライシマカスは少なくとも、この常連客であったことが女将たちとの会話から伺える。

Bawd: Here comes the Lord Lysimachus disguised.

Boult: We should have both lord and lown if the peevish baggage
would but give way to customers.

Lysimachus: How now, how a dozen of virginities?

Bawd: Now the gods to bless your honour.

Boult: I am glad to see your honour in good health.

...

Bawd: [*To Marina*] First, I would have you note, this is an honourable
man.

Marina: I desire to find him so, that I may worthily note him.

Bawd: Next he's the governor of this country, and a man whom I am
bound to.

(4.5.22-53)

つまりライシマカスは既に *virginity* を喪失しているわけである。これだけライシマカスの享樂ぶりがはっきりしているとすれば、仮にマリーナが *virginity* を守って彼との結婚に臨んでも、マリーナが唱える貞潔を前提とした、結婚の神聖な結びつきはもはやあり得ない。それどころか、女将の言うように病気が蔓延したり、様々な客が来る店に頻繁に出入りしていたとなれば、ライシマカスが現実的な意味において婚姻関係にダメージを与える可能性も、観客には容易に想像できよう。

だが、一国の領主が売春宿に足繁く通っている状況に対して、売春宿の女将やペリクリーズがその倫理観を咎めるでもない。マリーナが、客としてのライシマカスを説得する際に強調する、自らの *virginity* の絶対的価値が、男性のそれに対してはここで何ら問われることはない。マリーナ自身も、ライシマカスと自分の結婚話に拒絶や非難の態度を示すわけでもなく、二人の婚姻関係はいとも簡単に成立する。マリーナの *virginity* の価値は、婚姻の神の前にあっさり兜を脱ぎ、無と化してしまうのである。沈黙されるライシマカスの女性歴について、当時の家父長制的な視点からその不自然さの根拠を分析することも可能であろう。だがここではむしろ、売春宿においてマリーナが *virginity* の神聖さを強調し、女将や客たちにそれを説いてまわるからこそ、かえってライシマカスとの結婚話という大団円が、その説教を宙に浮かせてしまうというアイロニカルな効果を生み出していると捉えるべきである。

3. *Virginity* とピューリタン

Carroll も指摘するように、初期近代イングランドにおける *virginity* の概念とは、“The state of *virginity* thus exists only as a condition of potential loss.”(21) つまり、いかなる状況にあっても、最終的に失われる事を前提とした上で尊ばれる「価値」なのである。Carroll は、*marriage knot* や *true-*

lover's knot については、“the iconographic image of the elaborately encoiled and overlapping thread, with no beginning or end”(23) というように、精巧に絡み合い、途切れることのないイメージとして定義しているが、マリーナが4幕2場で主張するところの“virgin knot”(4.2.120)については、それらと区別して「(結婚によって) 破られるためにあるもの」と説明している。

The name ‘hymen’, to begin with, signifies both the god of marriage, and marriage generally, as well as the physical membrane; the same word thus figures the object which defines the virgin, and the ritual which demands the loss of that object. The state of virginity thus exists only as a condition of potential loss. . . . The marriage knot or true-lover’s knot cannot be ‘undone’, ‘untied’, or ‘dissolv’d’, then. It is forever. But the virgin knot is something else. . . . Clearly, the virgin knot – an external figure for the hymen within – is meant to be ‘untied’ or broken in marriage. (21–24)

Gossett によれば、実際、『ペリクリーズ』におけるマリーナの役割について、これまでに批評家たちの間では、一方でキリスト教的な観点から Virgin Mary の処女性と母性という二面的な側面を想起させる人物として捉え、一連の遭難と再会を「キリストの死と復活」(“the death and resurrection of Christ”(113)) と見做す向きがあった。また他方で、『ペリクリーズ』にも実際に登場し、劇の様々な場面で言及される神話的世界の女神ダイアナが持つ、処女性と多産（生殖）性が具現化された人物としてマリーナを位置づける見方もある。(113–21) ちなみに、ダイアナの別称シンシアは、virgin queen としてのエリザベス1世に用いられた呼び名でもある。(Gossett, 117) だがさらに、喪失という結果論的な観点から捉えれば、そのプロセスが結婚であっても売春であっても、virgin knot の本質は同じということになる。

さて、それではピューリタニズムの視点では virginité はどう捉えられるのだろうか。そもそもイングランドにおける「ピューリタン」をどう定義づけるかについては、地域的特性や社会の受けとめ方による違い、また時代とともに様々に教派が分岐していく過程を考えれば、一律に定義づけるのは難しいということも、多くの批評家が指摘している。⁶⁾ Durston や Eales も試みていることであるが、少なくともその出発点となっているカルヴァン (John Calvin, 1509–1564) の *Institutes of the Christian Religion* (1559) を紐解いてみると、virginité そのものは大切で尊重されるべきだが、人間は弱く、誰もがそれを守り通すことが出来るわけではないこと、また結婚以外の肉の交わりは否定されるべきだが、結婚における交わりは必須の策として肯定されている。カルヴァンにおいては、原罪に象徴される人間の肉の弱さは大前提として認められており、virginité の永遠性が絶対視されているわけではないので、女将が言うように「人類は根絶やしにされかねないよ。」(“undo a whole generation”(4.5.11–12)) ということにはならない。彼は、多くの人間にとってそれは難しいことで、それが出来るのは、特定の選ばれた人間だけだとする。

Hence, it is evident . . . that the conjugal relation was ordained as a necessary means of preventing us from giving way to unbridled lust. (Book Second, Chapter 8, 41)(257)

Virginité, I admit, is a virtue not to be despised; but since it is denied to some, and to others granted only for a season, those who are assailed by incontinence, and unable successfully to war against it, should retake themselves to the remedy of marriage, and thus cultivate chastity in the way of their calling. (Book Second, Chapter 8, 42)(257)

If he has not the power of subduing his passion, let him understand that the Lord has made it obligatory on him to marry. (Book Second, Chapter 8, 43)(257-58)

また、改革派プロテスタントで、当時その著書に人気のあった Henry Bullinger の1541年の提言によれば、私たちは「信仰」を介して、真の“pure virgins”として、キリストと最も純粋な形の結婚に導かれるのだと説いている。

Let them not read fables of fond and light love, but call upon God to have pure hearts and chaste, that they might cleave only to their spouse Christ, unto him married by faith which is the most purest wedlock of us all, pure virgins being both the married and the unmarried. (Henry Bullinger, *The Christian state of matrimony*)(Aughterson, 108)

ちなみに、1646年に出された *The Westminster Confession of Faith* における Chapter 24 の1と2では、キリストと教会の結合に基づいてなされる結婚の形として、一夫一婦制の明言、さらに汚れを避けるための結婚の必要性、ということが説かれている。

1. Marriage is to be between one man and one woman: neither is it lawful for any man to have more than one wife, nor for any woman to have more than one husband; at the same time.
2. Marriage was ordained for the mutual help of husband and wife, for the increase of mankind with a legitimate issue, and of the Church with an holy seed; and for preventing of uncleanness. (*The Westminster Confession of Faith*, Chapter 24)

一律に性的交わりを否定するのではなく、合法的な後継者、高德の子孫を残すための肉の交わりがここでも肯定されている。

4. Virginité –カトリックとの関わりにおいて–

Virginité 自体に重きをおいているのは、むしろカトリックであると言ってよい。それは、何よりも聖母マリアの処女性のイメージと強く関連づけて捉えられるからである。Gossett によれば、

実際、1609年から1610年にかけて、非国教徒 (recusant) の役者たちからなる Cholmley Players、またの名を *Simpsons of Egton Bridge* として知られる一座は、教皇を称えるような台詞や演出を劇の中になんまり取り入れていたようである。また『ペリクリーズ』5幕1場で、ペリクリーズがマリーナに再会した時に述べる「おまえに命を与えた男がおまえに命を与えられた」(“Thou that begetst him that did thee beget”(5.1.190)) という台詞は、聖母マリアを一座に意識させるに十分だったと解説している。なぜなら、聖母マリアは「神の母でもあり、子でもある」(“Mary is both mother and child of God”(120)) からだ。また、同じ時期の別の演出記録としては、ヨーク公のマナーハウスである *Gowthwaite Hall* で上演された劇を巡り、カトリック教のヨーク公とピューリタンの隣人との訴訟沙汰で、*Thomas Pant* という少年俳優が天使の役をしたと裁判で証言していることから、*Gossett* は、『ペリクリーズ』についても劇の演出がカトリック寄りに改ざんされた可能性を指摘している。例えばマリーナがライシマカスを説得する場面で、マリーナの背後に守護天使が並ぶという演出がされたとすれば、このような演出は、明らかにマリーナを聖母マリアと同一視して処女性を強調するために、カトリック的視点から意図的になされたものと考えられると述べている。(87-88)

ちなみにモアやエラスムスの友人でスペインの人文主義者であった *Juan Luis Vives* は、結婚前の処女についての提言で、基本的に男性から遠ざけておくこと、熱情を冷ますために断食をするか冷たい物を食べるのがよい、などと細かい指示を与えている。(Renaissance Woman, 69-70) また彼は、*Susan Wabuda* によれば、結婚の貞節よりも、永続する純粋な処女性の方が素晴らしいとはっきり説いている。⁽⁴⁾ 前述の改革派 *Bullinger* はこれに反対し、結婚後の貞節こそ神聖なものとしており、カトリックとの見解の相違が伺える。ちなみに、結婚後の妻の貞節 (chastity) については、当時ロンドンの説教師であったピューリタンの *Henry Smith* が結婚についての説教の中で、“home were chastity’s keeper”(Renaissance Woman, 83) と述べているが、夫に対する妻の従順という点についてはカトリックの教えも同様である。

5. 劇場をめぐる背景

それではなぜ、『ペリクリーズ』4幕5場で、女将は「カトリック教徒にされちまう」ではなく、「ピューリタンにされちまう」という台詞を言う必要があったのだろうか。このとき、当時のイングランドの劇場をめぐるピューリタンの影響を考慮する必要がある。1642年に劇場が封鎖されるまでに、様々な場面において、ピューリタンによる劇場非難が見られた。*Holden* は、ピューリタンによる劇場非難のプロセスについて詳しく説明しているが、それによると大体1577年頃から劇場への攻撃がはっきりと形をとってきたようである。非難の筆頭格には国教会派の聖職者 *John Northbrooke*、改革派の劇作家 *Stephen Gosson* などが挙げられている。(95) また *Philip Stubbes* の *The Anatomie of Abuses in England* (1583) では、エリザベス1世時代の愚行のひとつに、劇場が挙げられているということも紹介している。*Holden* によれば、基本的にピューリタンが劇場を非

難する初期の主な理由は、役者たちが安息日を犯していること、男性俳優の女装という2つの点であった。(99) 究極は1633年の William Prynne による *Histrio-Mastix. The Players Scourge* で、その中では劇の内容はもちろん、劇場の存在それ自体がイングランドの人々の生活に悪をもたらしていると強く批判されている。(99-100)⁶⁾ もちろん、ピューリタンが全て一律に劇場に対して批判的であったというわけではなく、彼らの中にも劇場のパフォーマンス効果を容認する向きもあったし、ピューリタンの劇作家も多くいたのはよく知られているところである。

また Rieger によれば、当時の売春宿は、劇場とほぼ地域を同じくしており、ロンドンでは大体テムズ川の南岸に位置していた。(55) したがって、梅毒を始めとする性病が流行ったのもまた劇場周辺だったわけであり、性病はキリスト教的観点からすれば「神による罰」(“divine punishment”(56))とさえされていた。このような劇場や売春宿は、当然ながらピューリタンにとっては忌むべき汚らわしい場所として、ひと括りに非難される対象であった。翻って劇場側からすれば、売春宿と隣り合わせのような彼らの縄張りで、マリーナのように頑なに virginity を固持し、その大切さを誰かれとなく説教してまわる行為は、むしろ場にそぐわず滑稽であり、喜劇的に揶揄する対象としやすかったし、また観客に好まれるテーマでもあった。Cressy は、初期近代のピューリタニズムの位置づけについて、“one of the most elusive categories or religious description in post-reformation England”(159)と述べており、また、1604年にカンタベリー大主教となった Richard Bancroft が、ピューリタンを“percisian”と呼んでその具体的な行いを列挙し、非難したことも紹介している。(125) 例えば “They hold it to be lawful for every minister without any licence or allowance thereunto by the bishop or other wise to preach where and whensoever it pleases him . . .”(159) といった箇所は、どこであろうと構わずに説教を唱えるお節介ぶりという点で、マリーナの態度にも通じるものがある。

このように考えれば、女将が「ピューリタンにされちまう」と嘆く台詞は、プロテスタントのイデオロギー的な側面に異議を唱えるというよりはむしろ、当時の劇場非難に対する応酬と、劇作品における反ピューリタンのテーマの流行に沿った言葉として受けとめられる。実際、カリカチュア的に誇張されたいわゆるステージ・ピューリタンは、当時観客の受けが非常によかった。それは例えば、ミドルトンの喜劇に多く登場するステレオタイプのピューリタンと重なるものがある。観客にとって、誇張化されたピューリタンを舞台上に見て笑いの対象とすることは、窮屈な教えや説教に対する反発の態度表明にもなったのである。Black は、シェイクスピア作品のうち、*Twelfth Night* のマルヴォーリオや *Henry IV* のフォルスタッフ、また *Much Ado About Nothing* のドグベリーも、ステージ・ピューリタンの例として挙げている。(Degenhardt, 167)

だが、『ペリクリーズ』における女将とボルトの会話は、Salkeld も指摘するように、別の意味で virginity をめぐる現実を観客に認識させる役割も果たしている。二人の会話は、初期近代当時のロンドンの状況をリアルに伝えることにより、ロマンス劇では再会と結婚の祝福のうちに Hymen と結びつけられるはずの virginity が、現実にはグロテスクな形で失われていることを観

客にいやでも気づかせる。Gossettによると、マリーナは14歳くらいと推定されるが、これによって当時のロンドンを中心とする児童売春の実態、またフランスやスペインの上位客が出入りしていることから、児童売買があっさり国境や階級を越えていた現状など、暗い側面も垣間見せているのである。(Salkeld, 61-67) しかも、マリーナと売春宿の女将たちはいずれも *virginité* が持つ価値に執着しているという点で、奇妙に一致している。マリーナの視点からはその道徳的価値に重きが置かれ、また売春宿の女将たちの視点からはその商業的価値が強調されている。*Virginité* が、全く違った意味で同じように価値があることが、同時的かつ対照的に示されるという点において、この場面は痛烈なアイロニーが込められた場面ということが出来る。女性の貞節を説く初期近代当時のステレオタイプ的なピューリタンが、実は社会の現状を何も見ていないという滑稽さが、ロマンス劇としてのあらずじ展開の中に突然出現するこのリアルな台詞の場面で浮き彫りにされる。

終わりに

これまで見てきたように、売春宿におけるマリーナの説教の場面は、彼女が自らの *virginité* を尊いものとしてそれを頑なに守ろうとするからこそ、なお一層、劇全体のあらずじ展開において通奏低音のように繰り返される *virginité* の喪失、脆さを観客に認識させる役割を果たしていると言える。マリーナの説教は、彼女自身の *virginité* の喪失をも観客に予感させるものである。そして、それが女将の台詞を通じ、当時のピューリタンに対する揶揄と重ね合わせて観客に捉えられることで、*virginité* は結果的に、悲劇的ではなく、喜劇的な笑いの中にやがて消えゆく有限のものとしての側面を持ち得たのである。

*本稿は、第53回シェイクスピア学会（於 学習院大学、2014年10月11日、12日）において口頭発表をした原稿に加筆修正を行ったものである。ピューリタニズムとシェイクスピア作品との関わりについては、慶應義塾大学の井出新氏を始め、多くの方々にいろいろと貴重なご意見を賜った。心より感謝申し上げます。

註)

- (1) テキストの引用は、ケンブリッジ版 (William Shakespeare, *Pericles*, ed. Doreen DelVecchio and Antony Hammond, Cambridge: CUP, 2012) に拠る。また『ペリクリーズ』の日本語訳は、小田島雄志訳（白水社、2010年）を用いた。
- (2) 20世紀以降の『ペリクリーズ』上演に関しては、様々な演出家がそれぞれ独自の劇世界を創り上げて個性を発揮している。そのうち、1969年に Terry Hands が演出したものは、アンタイオカスとポールト、サリアードとリーオナイン、クリーオンと売春宿の亭主、ダイオナイザと売春宿の女将、詩人ガウアーとヘリケーナス、マリーナとセーザについて一人二役というキャスティングで上演された。彼はこの演出により、破滅と癒しがあらずじの中で繰り返し展開される反復性を前面に出そうとした。それに対し、1979年の Ron Daniels の演出

では、登場人物のうちダイオナイザと女神ダイアナ、マリーナの乳母と売春宿の女将、サイモニディーズと売春宿の客、アンタイオカスの娘とマリーナについて、それぞれ一人の俳優に二役をあてがう事により、むしろその対照性を強調するという効果をねらっている。(Gossett, 92-93)

- (3) ビューリタニズムやピューリタンを定義することの難しさについては、Christopher Hill や Patrick Collinson を始めとして、多くの批評家が言及している。このうち、Collinson については、文化的な側面など特定の領域に限定した上での定義を試みている。いずれにせよ、定義は難しくても、ピューリタンと呼ばれ、また自らもそのように称した人々がいたことは事実であり、劇場側や観客がピューリタンに対するイメージをある程度共有していたことも事実である。そのように考えれば、様々な視点からの定義づけの試みは意義あることと言える。
- (4) “An apprehension of the pains of purgatory was always just below the surface in Vive’s thought, and the belief that a chaste marriage was less glorious than pure and perpetual virginity.”(121)
- (5) “The book [William Prynne’s *Histro-Mastix. The Players Scourge*(1633)] is divided into two parts or “tragedies,” and it repeats to tedium every argument which had been arrayed to prove that the English stage was an evil damned by scriptural and classical authority alike. The plays are the work of the devil and their subject matter is filthy and profane. The actors are no better than what they play; their lives are the model of immorality, while the audiences are no better than the actors. . . . Prynne’s attack is almost sufficient reason alone for the hatred between the stage and the Puritans . . . the theater is an evil force in English life both because of the contents of the plays and the environment of the playhouse.”(99-100)

参考文献

- Aughterson, Kate, ed. *Renaissance Woman: Constructions of Femininity in England*. London and New York: Routledge, 1995.
- Barish, Jonas. *The Anti-Theatrical Prejudice*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1981.
- Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. VI. London: Routledge and Kegan Paul, 1966.
- Calvin, John. *Institutes of the Christian Religion*. Trans. Henry Beveridge. Peabody: Hendrickson Publishers, 2008.
- Carroll, William C. “Language and sexuality in Shakespeare”. Catherine M. S. Alexander and Stanley Wells, eds. *Shakespeare and Sexuality*. Cambridge: CUP, 2001.14–34.
- Collinson, Patrick. *The Birthpangs of Protestant England*. London: Macmillan, 1988.
- . “Ben Jonson’s *Bartholomew Fair*: The Theatre Constructs Puritanism.” *The Theatrical City: Culture, Theatre and Politics in London, 1576–1649*. Ed. David L. Smith, Richard Strier and David Bevington. Cambridge: CUP, 1995. 157–69.
- . “Ecclesiastical Vitriol: Religious Satire in the 1590s and the Invention of Puritanism.” *The Reign of Elizabeth I: Court and Culture in the Last Decade*. Ed. John Guy. Cambridge: CUP, 1995. 150–70.
- Cressy, David and Lori Anne Ferrell, eds. *Religion and Society in Early Modern England: A Sourcebook—Second Edition*. New York and London: Routledge, 2005.
- Crockett, Bryan. *The Play of Paradox: Stage and Sermon in Renaissance England*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1995.
- Degenhardt, Jane Hwang and Elizabeth Williamson, eds. *Religion and Drama in Early Modern England: The Performance of Religion on the Renaissance Stage*. Farnham: Ashgate, 2011.
- Diehl, Huston. *Staging Reform, Reforming the Stage: Protestantism and Popular Theater in Early Modern England*. Ithaca: Cornell University après, 1997.
- DiGangi, Mario. *The Homoerotics of Early Modern Drama*. Cambridge: CUP, 1997.
- Durston, Christopher and Jacqueline Earles, eds. *The Culture of English Puritanism 1560–1700*. New York: St. Martin’s Press, 1996.
- Grace Tiffany. “Puritanism in Comic History: Exposing Royalty in the Henry Plays.” *Shakespeare Studies* 26(1998). 256–87,

258.

- Haselkorn, Anne M. *Prostitution in Elizabethan and Jacobean Comedy*. Troy, N.Y.: Whitston Publishing Company, 1983.
- Heinemann, Margot. *Puritanism and Theatre: Thomas Middleton and Opposition Drama under the Early Stuarts*. Cambridge: CUP, 1980.
- Heller, Herbert Jack. *Penitent Brothellers: Grace, Sexuality, and Genre in Thomas Middleton's City Comedies*. Newark: University of Delaware Press, 2000.
- Hill, Christopher. *Society and Puritanism in Pre-Revolutionary England*. London: Secker & Warburg, 1964.
- Holden, William. *Anti-Puritan Satire, 1573-1642*. New Haven: Yale University Press, 1954.
- Kahn, Coppelia. *Man's Estate: Masculine Identity in Shakespeare*. Berkeley: University of California, 1981.
- MacCulloch, Diarmaid. *Reformation: Europe's House Divided 1490-1700*. London: Penguin Books, 2004.
- Marshall, Peter and Alec Ryrie eds. *The Beginnings of English Protestantism*. Cambridge: CUP, 2002.
- Shakespeare, William. *Pericles*. Ed. Doreen DelVecchio and Antony Hammond. Cambridge: CUP, 2012.
- . *Pericles*. Ed. Suzanne Gossett. London: Methuen, 2004.
- Spurr, John. *English Puritanism 1603-1689*. London: Macmillan Press, 1998.
- The Westminster Confession of Faith*. 1646. Glasgow: Free Presbyterian Publications.
- White, Martin. *Middleton and Tourneur*. New York: St. Martin's Press, 1992.
- White, Paul Whitfield. *Theatre and Reformation: Protestantism, Patronage and Playing in Tudor England*. Cambridge: CUP, 1993.